

表 4 内定の有無別生徒の性別、学科、県、変更回数、変更有無

		全体		内定あり		内定なし	
		人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
合計		7424	100.0	1379	100.0	340	100.0
性別	男	3616	48.7	809	58.7	152	44.7
	女	3808	51.3	570	41.3	188	55.3
		Pearson の χ^2 乗21.562 漸近有意確率(両)					
学科	普通科	5208	70.2	529	38.4	178	52.4
	商業系学科	622	8.4	199	14.4	57	16.8
	工業系学科	774	10.4	419	30.4	29	8.5
	総合学科	594	8.0	165	12.0	59	17.4
	その他の学科	226	3.0	67	4.9	17	5.0
		Pearson の χ^2 乗70.055 漸近有意確率(両)					
県	秋田県	1891	25.5	539	39.1	121	35.6
	宮城県	1774	23.9	286	20.7	157	46.2
	石川県	2714	36.6	516	37.4	55	16.2
	神奈川県	1045	14.1	38	2.8	7	2.1
		Pearson の χ^2 乗106.906 漸近有意確率(両)					
回数 希望 進路 変更	0回	3239	43.6	559	40.5	115	33.8
	1回	2175	29.3	447	32.4	112	32.9
	2回	1570	21.1	300	21.8	87	25.6
	3回	393	5.3	63	4.6	22	6.5
	4回	47	0.6	10	0.7	4	1.2
		Pearson の χ^2 乗7.616 漸近有意確率(両)					
変更 有無	変更なし	3239	43.6	559	40.5	115	33.8
	変更あり	4185	56.4	820	59.5	225	66.2
		Pearson の χ^2 乗5.157 漸近有意確率(両)					

3.1.2 希望進路変更パターンと内定の有無

次に、高校3年冬の時点で正社員としての「内定あり」の生徒と希望しながらも「未内定」の生徒のそれぞれについて、希望進路変更パターンに違いが見られるかどうかを確認する。

表5が高校3年冬の時点で正社員希望で内定のあった生徒、表6が正社員希望だが未内定の生徒について、その希望進路変更パターンを整理したものである。

両者ともに「高校1年の時から一貫して就職を希望し続けた生徒」が最も多く、内定ありの生徒で40.5%、未内定の生徒で33.8%を占めており、大きな違いはないように見える。強いて言えば、内定ありの生徒については、上位7パターン、サンプルの62.1%が高校3年春の時点で就職希望でその後変化がないのに対し、未内定の生徒については上位5パターン、サンプルの48.5%にとどまっているという点であろうか。

性別学科別に見ても、希望が高校3年冬まで一貫している生徒が内定あり、未内定のどちらのケースにおいても一番多く見られるパターンであるという点は共通している。

平均希望進路変更回数という点から見ると、商業系学科とその他の学科計以外は、いずれも内定ありの生徒の方が未内定の生徒に比べて値が低い。したがって、内定のある生徒と未内定の生徒の希望進路変更パターンは、共に高校1年の時から一貫して就職を希望し続けた生徒が多いといった似たような傾向をもってはいるものの、グループ全体としては内定のある生徒よりも未内定の生徒の方が希望進路を途中で変える傾向のある様子が見てとれる。

表5 性別学科別希望進路の変更パターン一覧（内定あり）

	男女計			男性	女性	男女計																
	全学科			全学科	全学科	普通科	商業系学科	工業系学科	総合学科	その他の学科計												
サンプル数	1379			809	570	529	199	419	165	67												
平均希望進路変更回数	0.93			0.84	1.04	0.98	1.02	0.81	0.88	1.03												
高校1年	高校2年	高校3年春	高校3年夏	高校3年冬	希望進路変更回数	人数	%	累積%	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位				
就職	就職	就職	就職	就職 内定あり	0	559	40.5	40.5	367	1	192	1	178	1	77	1	204	1	75	1	25	1
考えてなかった	就職	就職	就職	就職 内定あり	1	73	5.3	45.8	51	2	22	5	32	2	7	3	27	2	5	4	2	6
専門各種	専門各種	就職	就職	就職 内定あり	1	58	4.2	50.0	23	5	35	2	31	3	5	6	7	8	11	2	4	3
専門各種	就職	就職	就職	就職 内定あり	1	56	4.1	54.1	26	4	30	3	28	4	7	3	13	4	4	8	4	3
迷っていた	就職	就職	就職	就職 内定あり	1	41	3.0	57.1	18	7	23	4	11	9	12	2	12	5	5	4	1	8
考えてなかった	考えてなかった	就職	就職	就職 内定あり	1	38	2.8	59.8	28	3	10	10	13	6	5	6	14	3	1	17	5	2
考えてなかった	迷っていた	就職	就職	就職 内定あり	2	32	2.3	62.1	23	5	9	11	10	11	5	6	9	6	5	4	3	5
専門各種	専門各種	専門各種	就職	就職 内定あり	1	32	2.3	64.5	11	11	21	6	12	8	6	5	8	7	5	4	1	8
迷っていた	迷っていた	就職	就職	就職 内定あり	1	27	2.0	66.4	15	8	12	7	13	6	2	12	5	11	6	3	1	8
大学	就職	就職	就職	就職 内定あり	1	26	1.9	68.3	14	9	12	7	15	5	2	12	7	8	2	12		
大学	大学	就職	就職	就職 内定あり	1	17	1.2	69.5	11	11	6	12	10	11	2	12	5	11				
考えてなかった	迷っていた	迷っていた	就職	就職 内定あり	2	16	1.2	70.7	11	11	5	16	6	15	2	12	6	10			2	6
考えてなかった	考えてなかった	迷っていた	就職	就職 内定あり	2	16	1.2	71.9	11	11	5	16	5	19	2	12	5	11	3	9	1	8

※「男女計」の「全学科」について全181パターン中上位13パターン（全サンプルの71.9%）を抽出

表6 性別学科別希望進路の変更パターン一覧（内定なし）

						男女計		男性	女性	男女計												
						全学科		全学科	全学科	普通科	商業系 学科	工業系 学科	総合学科	その他の 学科計								
サンプル数						340		152	188	178	57	29	59	17								
平均希望進路変更回数						1.08		0.97	1.17	1.18	1.02	0.83	1.08	0.71								
高校 1年	高校 2年	高校 3年 春	高校 3年 夏	高校 3年 冬	希望 進路 変更 回数	人数	%	累積 %	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位		
就職	就職	就職	就職	就職 内定 なし	0	115	33.8	33.8	60	1	55	1	51	1	23	1	13	1	19	1	9	1
専門 各種	専門 各種	就職	就職	就職 内定 なし	1	15	4.4	38.2	10	2	5	9	7	3	2	4	1	3	3	3	2	2
迷っ ていた	就職	就職	就職	就職 内定 なし	1	12	3.5	41.8	6	4	6	4	8	2	1	6	3	2				
専門 各種	就職	就職	就職	就職 内定 なし	1	12	3.5	45.3	3	8	9	2	7	3	3	3			2	6		
考え なかつた	就職	就職	就職	就職 内定 なし	1	11	3.2	48.5	5	5	6	4	6	5	1	6	1	3	2	6	1	3
専門 各種	専門 各種	専門 各種	就職	就職 内定 なし	1	11	3.2	51.8	5	5	6	4	5	6	4	2			2	6		
考え なかつた	迷っ ていた	就職	就職	就職 内定 なし	2	10	2.9	54.7	3	8	7	3	3	10	2	4			4	2	1	3
専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種	就職 内定 なし	1	8	2.4	57.1	2	11	6	4	3	10			1	3	3	3	1	3
考え なかつた	考え なかつた	就職	就職	就職 内定 なし	1	7	2.1	59.1	7	3			2	16	1	6	1	3	3	3		
短大	就職	就職	就職	就職 内定 なし	1	6	1.8	60.9	1	17	5	9	5	6					1	10		
短大	短大	短大	就職	就職 内定 なし	1	6	1.8	62.6			6	4	4	8	1	6			1	10		
就職	専門 各種	就職	就職	就職 内定 なし	2	5	1.5	64.1	4	7	1	22	2	16	1	6			2	6		
専門 各種	専門 各種	迷っ ていた	就職	就職 内定 なし	2	5	1.5	65.6	2	11	3	13	3	10					1	10	1	3
専門 各種	迷っ ていた	就職	就職	就職 内定 なし	2	5	1.5	67.1	1	17	4	11	4	8	1	6						
就職	就職	専門 各種	就職	就職 内定 なし	2	5	1.5	68.5	1	17	4	11	2	16	1	6	1	3	1	10		
考え なかつた	迷っ ていた	迷っ ていた	就職	就職 内定 なし	2	4	1.2	69.7	2	11	2	18	2	16			1	3	1	10		
大学	就職	就職	就職	就職 内定 なし	1	4	1.2	70.9	1	17	3	13	3	10			1	3				

※「男女計」の「全学科」について全96パターン中上位17パターン（全サンプルの70.9%）を抽出

3.2 多変量解析による分析

本項では、3.1 で見られた「未内定の生徒は内定のある生徒に比べて希望進路を途中で変えている傾向が強い」という点を確認したり、またそもそもどのような要因が内定／未内定に影響を与えているのかという点を明らかにするために、計量的な手法を用いた分析を試みることにする。

3.2.1 使用する手法および変数の概要について

ここでは内定の有無に与える影響を分析することから、「内定あり=1、内定なし=0」で構成される変数を従属変数として据える。したがって手法としては重回帰分析ではなく二項ロジット回帰分析を用いることとする。

投入する独立変数としては、性別や学科などの本人属性や大学進学率⁽⁴⁾、創立年といった通っている学校の属性に加え、本人の考え方（価値観）や家族へのコミットメントの程度、通学する学校の進路指導方針といった変数も使用する。これは高校生の場合、進路を決める際には家族や学校が生徒本人に与える影響が大きいと考えられるためである。

また、本章の分析の軸をなす「希望進路変更回数」と「希望進路変更有無」も生徒が進路を選択していく過程での「迷い」や「ゆらぎ」を示す変数として使用する。

3.2.2 変数の詳細

使用する変数の詳細をまとめたのが表7である。

このうち、h・1は自分自身に対する肯定的（あるいは否定的）な評価の程度を表すものであり、これを足しあげることで「自己評価の高さ」の程度を示す変数とした⁽⁵⁾。

h・2は運やチャンスといった運命論的な考え方の志向を表すものとして、h・1とは区別して扱うこととした。

また、j・1からj・4については、進路指導についての設問が数的にも多く、視点も多岐にわたるため、因子分析してグルーピングをした上で変数化することとした。その結果は表8のとおりである。

表 7 使用する変数一覧

従属変数		
	内定の有無	内定あり=1、未内定=0
独立変数		
a	性別ダミー（本人属性）	男性（参照カテゴリ：女性） 生徒調査より
b	学科ダミー（本人属性）	普通科、商業系学科、工業系学科、総合学科 （参照カテゴリ：その他の学科） 生徒調査より
c	県ダミー（本人属性）	秋田県、宮城県、石川県（参照カテゴリ：神奈川県） 生徒調査より
d	大学進学率（学校属性）	学科別の大学・短大進学率（0%～100%） 高校調査より
e	高校創立年（学校属性）	（年（西暦）） 高校調査より
f	希望進路変更回数	（0回～4回） 生徒調査より算出
g	希望進路変更有無	（0=変更なし、1=変更あり） 生徒調査より算出
h-1	自己評価の高さ（本人要素）	生徒調査より算出 問 24. 「次のような事からは、あなたにどれほどあてはまりますか」のうち B. 私には人並みの能力がある C. 全体として、自分に満足している D. 自分には何のとりえもないと感じる E. 決めたことは最後までやり遂げる自信がある に対する回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
h-2	依存性（本人要素）	生徒調査より算出 問 24. 「次のような事からは、あなたにどれほどあてはまりますか」のうち A. 成功するためには、努力より運が重要だ F. 人生にとってチャンスと運は重要だ に対する回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
i	家族との会話の頻度（家族要素）	生徒調査より算出 問 30. 「あなたのご家族(保護者)と、次の事柄についてどれほど頻繁に話合いますか（8事柄）」に対する回答（それぞれ3段階で回答）を足しあげて平均した値
j-1	職業指導に関する熱意（学校要素）	高校調査より算出 問 10. 「次のことがらは、貴校の進路指導にどれほどあてはまりますか（12事柄）」の回答を因子分析により分解した成分ごとに回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
j-2	生徒に近い（生徒にやさしい）進路指導の程度（学校要素）	高校調査より算出 問 10. 「次のことがらは、貴校の進路指導にどれほどあてはまりますか（12事柄）」の回答を因子分析により分解した成分ごとに回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
j-3	進路選択に関する生徒へのコミットメントの強さ（学校要素）	高校調査より算出 問 10. 「次のことがらは、貴校の進路指導にどれほどあてはまりますか（12事柄）」の回答を因子分析により分解した成分ごとに回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値
j-4	学習指導・生活指導を優先しなければならない程度（学校要素）	高校調査より算出 問 10. 「次のことがらは、貴校の進路指導にどれほどあてはまりますか（12事柄）」の回答を因子分析により分解した成分ごとに回答（それぞれ4段階で回答）を足しあげて平均した値

表8 進路指導に関する設問の因子分析結果

	回転後の成分行列				
	1	2	3	4	
A. 相談しやすい雰囲気づくりを心がけている	-0.051	0.825	0.110	-0.013	j-2:生徒に近い(生徒にやさしい)進路指導の程度
B. 具体的な情報を集めて教えている	0.260	0.760	0.184	0.139	
C. 職業についての考え方などの指導に力点	0.743	0.265	0.065	-0.125	j-1:職業指導に関する熱意
D. 労働者の権利や雇用システムについて教える	0.801	0.053	0.231	0.155	
E. 具体的な就職先や進学先の提案	0.354	0.551	-0.099	-0.436	
F. 求人開拓を熱心に行っている	0.798	0.073	0.194	0.107	j-3:進路選択に関する生徒へのコミットメントの強さ
G. 労働条件が望ましくない求人は提示しない	0.086	0.086	0.641	0.256	
H. 求人不足から進学への進路変更を指導	0.249	-0.033	0.714	-0.145	j-4:学習指導・生活指導を優先しなければならない程度
I. 卒業までに進路を必ず決めるように指導	0.462	-0.195	0.150	-0.605	
J. 進路に関しては生徒自身の考えに任せる	0.169	-0.138	-0.508	0.542	
K. 説明会などに出席しない生徒には注意する	0.307	0.308	0.596	-0.041	
L. 進級・卒業が優先課題で卒業後までは手が回らない	0.182	-0.011	0.136	0.671	

※因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

3.2.3 分析結果

上述の変数を用い、二項ロジット回帰にて内定の有無を規定する要因を分析してみたところ、プラスに有意だった変数は「工業系学科」、「自己評価の高さ」であり、マイナスに有意だったのは「宮城県」、「希望進路変更回数」、「家族との会話の頻度」という結果が得られた(表9)。表4のクロス表分析で有意な差が認められた「性別」や「希望進路変更有無」は本項のロジット回帰分析では有意とはならなかった。ただ、クロス表分析では有意な差が認められなかった「希望進路変更回数」がこちらではマイナスに有意な変数という結果であったことから、希望進路を変更するということは、内定獲得という面ではマイナスに寄与する、すなわち、例えば在学中に就職にするか専門学校に進学するかと迷うことは、最終的に「卒業後就職」という選択をした場合に不利に働く可能性があるといえるのではないだろうか。

そのほか、「工業系学科」が内定獲得にプラスに寄与するということは予想通りの結果といえる。また「自己評価の高さ」がプラスに寄与するという結果については、自分に自信

をもっている生徒ほど企業側にとって魅力的に映って内定が得やすくなるのかもしれないし、調査時点を考慮すると内定獲得を通じて自己評価が高まったのかもしれない。「家族との会話の頻度」がマイナスに寄与するという結果の解釈については検討の余地があると思われる。

表 9 内定の有無の規定要因分析の結果（二項ロジット回帰）

従属変数：内定あり=1、内定なし=0 / サンプル数1,292				
		係数	標準誤差	有意確率
本人属性	性別	-0.031	0.170	0.856
	学科（参照：その他の学科）			0.000
	普通科	-0.709	0.412	0.085
	商業系学科	-0.593	0.435	0.173
	工業系学科	1.296	0.502	0.010
	総合学科	-0.377	0.415	0.363
	県（参照：神奈川県）			0.000
	秋田県	-0.533	0.483	0.270
	宮城県	-1.335	0.484	0.006
	石川県	0.118	0.501	0.814
属学校性	大学進学率	0.315	0.554	0.569
	高校創立年	0.001	0.001	0.232
希望進路変更回数		-0.342	0.131	0.009
希望進路変更有無		0.293	0.268	0.275
要本人素	自己評価の高さ	0.545	0.154	0.000
	依存性	-0.241	0.132	0.068
要家族素	家族との会話の頻度	-0.447	0.189	0.018
学校要素	職業指導に関する熱意	-0.195	0.240	0.416
	生徒に近い（生徒にやさしい） 進路指導の程度	0.225	0.276	0.415
	進路選択に関する生徒への コミットメントの強さ	0.324	0.170	0.057
	学習指導・生活指導を優先 しなければならない程度	0.021	0.240	0.930
		Cox & Snell R ² 乗	0.418	

4. 就職活動中の進路変更について

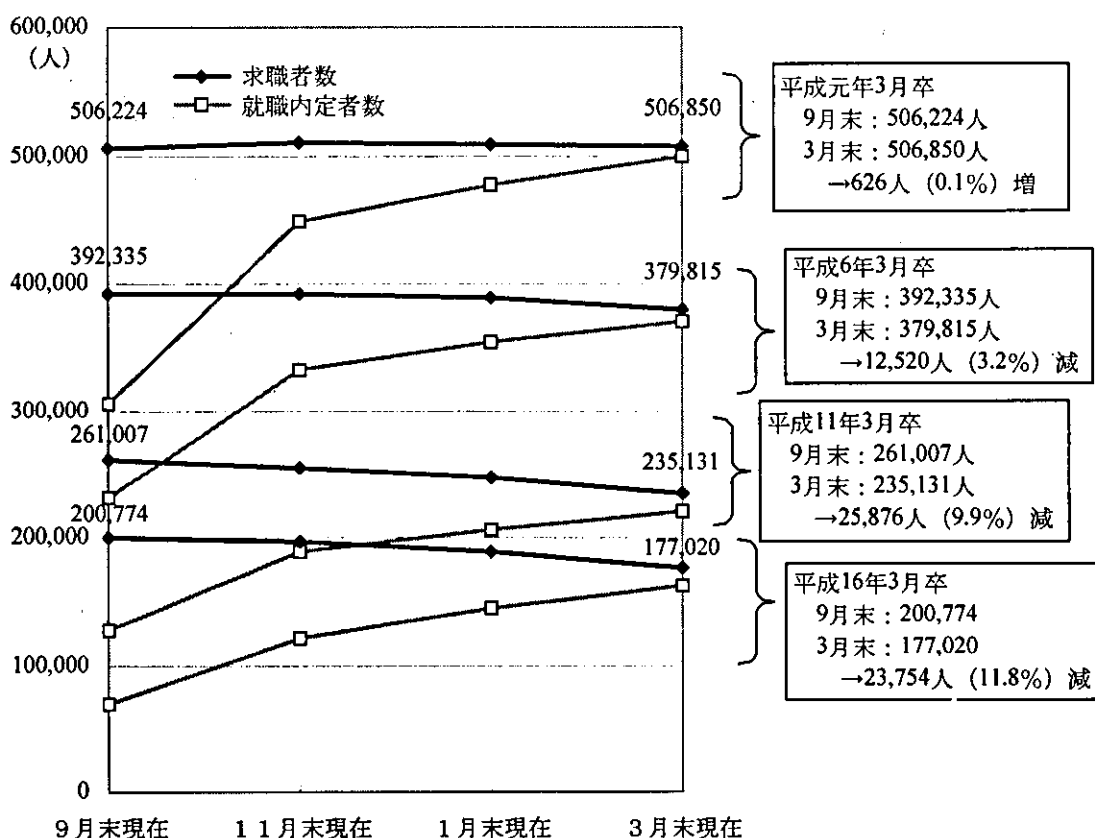
4.1 秋に希望を変えるのはどんな生徒か

前節では、高校3年冬の時点まで就職を希望している生徒を対象としたが、本節ではその1時点前、高校3年夏の時点で就職を希望している生徒に焦点をあてる。その理由は、近年9月に入り企業への応募・推薦が解禁されてから就職希望者が漸減していくという傾向が見られることから、希望進路変更パターンのデータを利用してその中身をより具体的に確かめることで、高校生の就職戦線で何が起きているのかを数値をもって明らかにでき

るのではないかと考えたからである。

まずは就職希望者の漸減について確認する。図4は高校新卒者の求職者数と就職内定者数の推移を5年毎にグラフ化したものである。これを見ると、平成元年3月卒業者については9月末と3月末の時点での求職者数はほぼ横ばいであるが、時の経過に伴い9月末と3月末の求職者数に徐々に開きの出始める様子がわかる。平成16年3月卒業者については、9月の時点で就職を希望していた生徒のうち1割以上が求職するのをやめて、他の進路にこぼれだしている。

図4 高校新卒者の求職者数と就職内定者数の推移



(出所) 厚生労働省「高校・中学新卒者の求人・求職・就職内定状況等の推移」

次に、希望進路変更パターンのうち高校3年夏の時点で就職を希望していた生徒を抜き出し、それを高校3年冬の時点で就職を希望していた否かでグループ分けして、その特徴を見る。

表 10 希望進路変更パターン別予定進路、性別、学科、県、希望進路変更回数、
希望進路変更有無（高校3年夏時点で就職を希望していた生徒のみ）

		全体		就職希望 →就職希望		就職希望 →就職以外希望	
		人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
合計		7424	100.0	1588	100.0	171	100.0
高校卒業後の 予定進路	正社員内定あり	1379	18.6	1281	80.7		
	正社員未内定	340	4.6	292	18.4		
	専門・各種学校：進学先決定済み	1296	17.5			43	25.1
	専門・各種学校：進学先未決定	206	2.8			12	7.0
	短大：進学先決定済み	527	7.1			10	5.8
	短大：進学先未決定	122	1.6			2	1.2
	4年制大学：進学先決定済み	1573	21.2			10	5.8
	4年制大学：進学先未決定	1566	21.1			7	4.1
	フリーター	147	2.0			52	30.4
	家業手伝い	24	0.3	15	0.9		
	その他	49	0.7			14	8.2
	卒業後まったく未定	45	0.6			19	11.1
	進学希望：詳細不明	149	2.0			2	1.2
	正社員内定あり+専門学校進学先 決定済み	1	0.0				
Pearson の χ^2 乗1759.000 漸近有意確率（両側）0.000							
性別	男	3616	48.7	899	56.6	90	52.6
	女	3808	51.3	689	43.4	81	47.4
Pearson の χ^2 乗0.994 漸近有意確率（両側）0.319							
学科	普通科	5208	70.2	639	40.2	86	50.3
	商業系学科	622	8.4	236	14.9	26	15.2
	工業系学科	774	10.4	430	27.1	22	12.9
	総合学科	594	8.0	204	12.8	31	18.1
	その他の学科	226	3.0	79	5.0	6	3.5
Pearson の χ^2 乗19.844 漸近有意確率（両側）0.001							
県	秋田県	1891	25.5	623	39.2	63	36.8
	宮城県	1774	23.9	403	25.4	53	31.0
	石川県	2714	36.6	525	33.1	44	25.7
	神奈川県	1045	14.1	37	2.3	11	6.4
Pearson の χ^2 乗14.191 漸近有意確率（両側）0.003							
回数 希望 進路 変更	0回	3239	43.6	679	42.8		
	1回	2175	29.3	526	33.1	65	38.0
	2回	1570	21.1	324	20.4	62	36.3
	3回	393	5.3	59	3.7	38	22.2
	4回	47	0.6			6	3.5
Pearson の χ^2 乗243.499 漸近有意確率（両側）0.000							
変更有無 希望 進路	変更なし	3239	43.6	679	42.8		
	変更あり	4185	56.4	909	57.2	171	100.0
Pearson の χ^2 乗119.085 漸近有意確率（両側）0.000							

表 10 の右側は、高校 3 年夏の時点で就職を希望していた生徒をその後就職を希望し続けた者と進路変更した者の 2 グループに分け、その予定進路、性、学科、県、希望進路変更回数、希望進路変更有無をクロス表の形で整理したものである。

これを見ると、高校 3 年夏に就職を希望していた生徒の進路変更先としては「フリーター」が最も多いことがわかる。「卒業後まったく未定」と回答した生徒とあわせると 71 人になる。全サンプルが 7,424 であるから全体に占める比率は 1%にも満たないが、夏に就職を希望していた $1,588+171=1,759$ 人に対しては 4.0%を占めている。高校 3 年夏に就職を希望していながら冬の時点では「フリーター」や「まったく未定」と答えている生徒というのは、一度就職あっせんの枠組みによって就職活動をしたものの、結果が出なかったため早々に就職をあきらめてしまったという可能性が高いのではないだろうか。そうだとすると、就職希望者の少なくとも 25 人に 1 人は不本意ながらも就職しないで卒業していく、いわゆる職業への「スムーズな移行^⑥」ができなかった生徒ということになる。

そのほかに指摘できる点としては、男女の間に有意な差が見られないということ、工業系学科ではそのまま就職を希望し続けている生徒が多いということ、神奈川県ではその他の県に比べて就職から方向転換している生徒の比率が高いということなどがあげられる。

4.2 秋に希望を変えた生徒の希望進路変更パターン

本項では、高校 3 年夏の時点では就職を希望しながら高校 3 年冬の時点では就職以外の進路を選択・希望した生徒の希望進路の変遷をより細かく把握することを試みる。

表 11 は高校 3 年夏に就職希望でその後（希望）進路を変更した 186 人の生徒の希望進路変更パターン一覧である。これを見ると、高校 1 年から高校 3 年夏まで就職を希望し続けた生徒というのが上位を占めていることがわかる。最終的に進路が決定した 2 位（専門・各種学校進学先決定 16 名）、8 位（短大進学先決定 5 名）、10 位（大学進学先決定 3 名）や家業手伝いをすることにした 5 名（7 位）はともかくとして、高校 3 年夏まで一貫して就職を希望していながら最終的にはフリーター（1 位、19 名）やその他（3 位、8 名）、専門・各種学校進学先未定（4 位、6 名）、考えていない（4 位、6 名）となった生徒たちは、おそらく先述のような、就職活動をしたにもかかわらず結果が出ず、就職をあきらめて卒業していつている可能性が高いのではないか。

表 11 性別学科別希望進路の変更パターン一覧
(高校3年夏に就職希望でその後(希望)進路を変更した生徒)

	男女計			男性	女性	男女計												
	全学科			全学科	全学科	普通科	商業系 学科	工業系 学科	総合学科	その他の 学科計								
サンプル数	186			101	85	97	27	24	32	6								
平均希望進路変更回数	1.86			1.87	1.85	1.90	1.93	1.83	1.72	1.00								
希望進路変更回数	人数	%	累積 %	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位							
就職:就職:就職:フリーター	1	19	10.2	10.2	8	2	11	1	11	1	2	2	1	2	5	1	-	-
就職:就職:就職:専門各種決定	1	16	8.6	18.8	12	1	4	3	5	2	3	1	6	1	2	3	-	-
就職:就職:就職:その他	1	8	4.3	23.1	1	14	7	2	3	4	1	5	1	2	2	3	1	1
就職:就職:就職:専門各種未決定	1	6	3.2	26.3	6	3	-	-	3	4	-	-	1	2	2	3	-	-
専門:専門:就職:フリーター	2	6	3.2	29.6	3	4	3	6	1	17	-	-	-	-	4	2	1	1
就職:就職:就職:考えていない	1	6	3.2	32.8	2	6	4	3	2	7	2	2	-	-	2	3	-	-
就職:就職:就職:家業手伝い	0	5	2.7	35.5	2	6	3	6	5	2	-	-	-	-	-	-	-	-
就職:就職:就職:短大決定	1	5	2.7	38.2	1	14	4	3	2	7	2	2	-	-	-	-	1	1
専門:就職:就職:フリーター	2	4	2.2	40.3	2	6	2	8	2	7	-	-	1	2	1	8	-	-
就職:就職:就職:大学決定	1	3	1.6	41.9	3	4	-	-	2	7	1	5	-	-	-	-	-	-
大学:就職:就職:専門各種決定	2	3	1.6	43.5	2	6	1	13	3	4	-	-	-	-	-	-	-	-
迷っていた	2	3	1.6	45.2	1	14	2	8	2	7	1	5	-	-	-	-	-	-
専門:専門:専門:就職:専門各種決定	2	3	1.6	46.8	1	14	2	8	1	17	1	5	-	-	-	-	1	1
専門:専門:専門:フリーター	2	3	1.6	48.4	1	14	2	8	1	17	-	-	-	-	2	3	-	-
大学:就職:就職:大学未決定	2	2	1.1	49.5	2	6	-	-	2	7	-	-	-	-	-	-	-	-
大学:大学:大学:大学未決定	2	2	1.1	50.5	2	6	-	-	2	7	-	-	-	-	-	-	-	-
大学:大学:大学:就職:大学決定	2	2	1.1	51.6	2	6	-	-	1	17	-	-	1	2	-	-	-	-
考えなかった	3	2	1.1	52.7	2	6	-	-	1	17	-	-	1	2	-	-	-	-
大学:大学:就職:専門各種決定	2	2	1.1	53.8	1	14	1	13	2	7	-	-	-	-	-	-	-	-

						男女計			男性	女性	男女計								
						全学科			全学科	全学科	普通科	商業系 学科	工業系 学科	総合学科	その他の 学科計				
サンプル数						186			101	85	97		27	24	32	6			
平均希望進路変更回数						1.86			1.87	1.85	1.90		1.93	1.83	1.72	1.00			
高校 1年	高校 2年	高校 3年 春	高校 3年 夏	高校 3年 冬	希望 進路 変更 回数	人数	%	累積 %	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位	
大学	大学	大学	就職	フリーター	2	2	1.1	54.8	1	14	1	13	2	7	-	-	-	-	
大学	迷っていた	就職	就職	専門各種決定	3	2	1.1	55.9	1	14	1	13	2	7	-	-	-	-	
考えてなかった	就職	就職	就職	フリーター	2	2	1.1	57.0	1	14	1	13	1	17	-	-	-	1	1
専門各種	専門各種	迷っていた	就職	フリーター	3	2	1.1	58.1	1	14	1	13	1	17	-	-	1	8	
大学	大学	就職	就職	考えていない	2	2	1.1	59.1	1	14	1	13	1	17	-	-	1	8	
フリーター	フリーター	就職	就職	フリーター	2	2	1.1	60.2	-	-	2	8	1	17	-	-	1	8	

※「男女計」の「全学科」について全99パターン中上位25パターン（全サンプルの60.2%）を抽出

4.3 秋に希望を変える理由

では、高校3年夏の時点では就職を希望していながら、なぜ最終的には希望進路を変更することにしたのだろうか。そこで、高校3年夏の時点で就職を希望していた人が最終的に別の進路を選択した理由を見ていくことにする。

まず、最終的にフリーターになると回答した生徒にその理由をたずねた結果が表12である。これを見ると、高校3年夏に就職希望していた生徒は「いい就職先がないから（48.1%）」、「好きな仕事ならばフリーターでもかまわないから（40.4%）」と答える傾向が高く、反対に「進学や就職ではなく、他にやりたいことがあったから（7.7%）」、「やりたいことがわからなかったから（17.3%）」の比率が低い。この回答状況からも、高校3年夏に就職を希望していたフリーターは、本当は就職したいのだがやむを得ずフリーターを選択しているものと推察される。

表 12 フリーターになる理由（複数回答、上段：度数、下段：構成比）

		進学したくないから	進学する費用が高いから	進学するには成績が不十分だから	いい就職先がないから	まわらないから	好きな仕事ならばフリーターでもかまわないから	正社員として働くのはいやだから	とがあつたから	進学や就職ではなく、他にやりたいことがあつたから	やりたいことがわからないから	今のアルバイトを続けたいから	身近にフリーターがいるから	その他	無回答	計
計		25	49	24	51	50	8	25	35	8	8	28	3	147		
		17.0	33.3	16.3	34.7	34.0	5.4	17.0	23.8	5.4	5.4	19.0	2.0	100.0		
変更パターン	就職希望→フリーター	8	19	8	25	21	2	4	9	3	2	15	0	52		
		15.4	36.5	15.4	48.1	40.4	3.8	7.7	17.3	5.8	3.8	28.8	0.0	100.0		
就職関係希望進路	就職以外希望→フリーター	17	30	16	26	29	6	21	26	5	6	13	3	95		
		17.9	31.6	16.8	27.4	30.5	6.3	22.1	27.4	5.3	6.3	13.7	3.2	100.0		

次に、進学に（希望）進路を変えた生徒について見てみる。表 13 は最終的に進学を選択・希望した生徒に進学する理由についてたずねている設問のうち、就職がらみの設問への回答状況について抜き出して整理したものである。どの設問でも高校3年夏に就職を希望していた生徒とそうでない生徒の回答の間には有意な差が見られるが、中でも表の左側「いい就職先がなかったから」という項目や「就職試験に失敗したから」という項目に対して「とてもあてはまる」または「ややあてはまる」と回答した生徒がそれぞれ 31.4%、65.1%に達している点に注目したい。特に後者の結果は、進学への希望進路転換組には「就職に失敗しなければ進学を希望することはなかったであろう」生徒が3分の2弱を占めていることを表しているといえる。

表 13 進学（を希望）する理由（上段：度数、下段：構成比）

		H. いい就職先がなかったから						I. 自分の成績では学校から就職先に推薦してもらえないから						J. 就職試験に失敗したから						合計			
		まる	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	わからない	無回答	まる	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	わからない	無回答	まる	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	わからない	無回答	合計
合計		199	327	929	342	447	115	84	147	765	363	698	108	71	74	244	476	160	126	544			
		3.7	6.0	17.1	62.9	8.2	2.1	1.5	2.7	14.1	66.9	12.8	2.0	1.3	1.4	4.5	87.6	2.9	2.3	100.0			
変更パターン	就職希望	9	18	14	35	7	3	7	20	40	16	3	33	23	4	23	3	3	86				
		10.5	20.9	16.3	40.7	8.1	3.5	8.1	23.3	46.5	18.6	3.5	38.4	26.7	4.7	26.7	3.5	3.5	100.0				
就職関係希望進路	就職以外希望	190	309	915	338	440	112	84	140	745	359	682	105	38	51	240	474	160	123	535			
		3.5	5.8	17.1	63.3	8.2	2.1	1.6	2.6	13.9	67.2	12.7	2.0	0.7	1.0	4.5	88.6	3.0	2.3	100.0			
		Pearson の χ^2 乗 51.098 漸近有意確率（両側） 0.000						Pearson の χ^2 乗 24.844 漸近有意確率（両側） 0.000						Pearson の χ^2 乗 1373.820 漸近有意確率（両側） 0.000									

最後に、参考までに高校3年夏の時点で就職を希望し、その後も内定は得られていないもののなお就職を希望し続けている生徒について、就職できない理由をどのように認識しているのか確認しておきたい。これは就職を希望し続けるか否かを分けるものがあるかどうかを観察するためである。

表14は高校3年冬の時点でも就職を希望しているが未内定の生徒に対して、就職できない理由をたずねた結果である。これを見ると高校3年夏の時点から継続して就職を希望している生徒は就職できない理由として「希望する職種の求人が少ないから(56.5%)」、「求人数自体が少ないから(37.7%)」をあげる比率が高い。さらに、比較対象となるサンプル数が少ないため強く言い切ることは難しいが「本当は就職したくないと思っているから」の比率は4.8%と低い。

これや表12や表13の結果から言えることは、いずれのタイプの生徒も「いい就職先がないから」、「希望する職種の求人が少ないから」といった求人の量や質を問題としており、「他にやりたいことがあったから」、「やりたいことがわからなかったから」、「本当は就職したくないと思っているから」などといった就職自体に消極的な姿勢をとっているというわけではないということである。

では、就職を希望し続けるか、それとも他の進路を希望・選択するのかを分ける分岐点はどこにあるのだろうか。

表14 就職できない理由(複数回答、上段：度数、下段：構成比)

		少ないから	希望する職種の求人が少ないから	希望する賃金の求人が少ないから	希望する労働時間の求人が少ないから	希望する会社に学校が推薦してくれないから	希望する会社自体が少ないから	自分が特定の仕事にこだわっているから	学校の成績がよくないから	学校での遅刻や欠席が多いから	学校の遅刻や欠席が多いため	会社の面接試験でうまく答えられないから	本当は就職したくないと思っているから	その他	無回答	計
計		184	25	11	121	7	98	72	49	77	20	59	6	340		
		54.1	7.4	3.2	35.6	2.1	28.8	21.2	14.4	22.6	5.9	17.4	1.8	100.0		
就職関係希望	就職希望	165	24	9	110	5	84	61	40	64	14	50	5	292		
	就職希望	56.5	8.2	3.1	37.7	1.7	28.8	20.9	13.7	21.9	4.8	17.1	1.7	100.0		
	就職以外希望	19	1	2	11	2	14	11	9	13	6	9	1	48		
		39.6	2.1	4.2	22.9	4.2	29.2	22.9	18.8	27.1	12.5	18.8	2.1	100.0		

4.4 多変量解析による分析

高校3年の夏に就職を希望していた生徒が就職を希望し続けるか、それとも他の進路を希望・選択するのか、その分岐点を探るために、本項では多変量解析の手法を用いて分析してみることにする。

4.4.1 使用する手法および変数の概要について

ここでは希望進路の変更有無に与える影響を分析することから、「高校3年夏には就職希望したがその後変更あり=1、高校3年夏に就職希望しておりその後の変更なし=0」で構成される変数を従属変数として据える。したがって手法としては重回帰分析ではなく二項ロジット回帰分析を用いることとする。

投入する独立変数としては、第3節の「最終的に就職を希望する生徒」と同様、性別や学科などの本人属性や大学進学率、創立年といった通っている学校の属性に加え、本人の考え方（価値観）や家族のコミットメントの程度、通学する学校の進路指導方針といった変数も使用する。

ただし、前節の分析で使用した「希望進路変更回数」と「希望進路変更有無」については、従属変数の設定をする際に使用する変数であることから、本節の分析では独立変数には使用しないこととする。

変数の詳細は3.2.2と同じである。

4.4.2 分析結果

分析結果は表15のとおりである。「自己評価の高さ」のみマイナスに有意であった。マイナスに有意ということは、希望進路の継続に寄与するということである。前節の分析から自己評価の高い生徒は内定を獲得しやすい傾向にあることが分かっているが、本節の分析結果とあわせて考えると、自己評価の高い生徒は内定を獲得しやすく、また未内定である場合も継続して就職活動をする傾向にあると考えられる⁷⁾。

つまり、性別や所在地、通っている学校の属性や進路指導などとは関係なく、ただ本人が自分自身に対して一定の自信をもつことができれば道の開ける可能性が高くなるということなのだろうか。そしてそのような、自分自身に対する自信を持つことができるような、学校生活をはじめとする日常生活をおくることが高校生にとっては大切ということなのであろうか。

ただし、自己評価の高さが大切、という結果自体には納得できるものがあるが、それだけが大切なのかという点についてはやはり疑問が残る。投入する変数などについてもっと検討していく必要があるだろう。

表 15 希望進路変更有無（高校3年夏就職）の規定要因分析の結果（二項ロジット回帰）

		係数	標準誤差	有意確率
従属変数：高校3年夏には就職希望したがその後変更あり=1、 高校3年夏に就職希望しておりその後の変更なし=0 サンプル数1,759				
本人属性	性別	0.087	0.211	0.681
	学科（参照：その他の学科）			0.092
	普通科	0.212	0.624	0.734
	商業系学科	-0.116	0.655	0.859
	工業系学科	-0.469	0.646	0.468
	総合学科	0.585	0.621	0.346
	県（参照：神奈川県）			0.155
	秋田県	-0.599	0.454	0.187
	宮城県	-0.289	0.473	0.541
石川県	-0.908	0.483	0.060	
属学校	大学進学率	0.765	0.642	0.234
	高校創立年	-0.001	0.001	0.241
要素本人	自己評価の高さ	-0.513	0.197	0.009
	依存性	0.045	0.161	0.781
要素家族	家族との会話の頻度	0.170	0.237	0.472
学校要素	職業指導に関する熱意	-0.359	0.266	0.177
	生徒に近い（生徒にやさしい） 進路指導の程度	0.401	0.320	0.210
	進路選択に関する生徒への コミットメントの強さ	-0.133	0.211	0.530
	学習指導・生活指導を優先 しなければならない程度	0.330	0.272	0.224
		Cox & Snell R ² 乗 0.543		

5. まとめと課題

本章の分析結果および課題をまとめると、下記のようになる。

- ① 高校生全体を見た場合、希望進路の変更はあまり行われておらず、平均希望進路変更回数も1回を下回る。特に普通科の平均値が低い、これは進学校が含まれているためと考えられる。大学進学が常態化しつつある昨今としては当然の結果と言える。希望進路変更パターンという形で見ても、1位、2位を占めたのは高校1年時から高校3年冬まで一貫して大学進学を希望しているパターンであった。大学進学以外でも、上位にくるのは高校1年から希望進路が一貫しているパターンであった。
- ② 希望進路を変更するとすれば、それは「高校1年から高校2年の間」である場合が多い。ただし、「高校3年夏から高校3年冬の間」といった直前の時期にも1割前後の生徒が希望進路を変更している。
- ③ 就職を希望している生徒については、内定獲得の有無にかかわらず、高校1年から一貫

して就職を希望しているケースが多い。しかし、クロス表分析、多変量解析どちらにおいても希望進路の変更は内定の獲得にマイナスに寄与するという結果であった。そのほか、工業系学科および自己評価の高さはプラスに寄与し、宮城県や家族との会話の頻度はマイナスに寄与するとの結果であったが、本当にこれが妥当な結果なのか、家族とのコミットメントが高い生徒は内定を得にくいのか、式や変数のさらなる吟味が必要と思われる。

- ④高校3年夏から高校3年冬の間、すなわち高校3年秋に就職から他の進路に希望・選択を変更した生徒には、「高校3年夏までは就職を希望」していたものの、「いい就職先がない」、「希望する職種の求人が少ない」、「就職試験に失敗した」などといった理由からやむを得ず他の進路に変更した者が多く、その変更先としては「フリーター」が最も多い。まじめに持続的に就職を希望しながらも結果が出ずに不本意ながら「フリーター」や「卒業後まったく未定」なまま卒業していく生徒が規模は小さいながらも一定数存在している。
- ⑤高校3年の秋に就職から他の進路に希望・選択を変えるか否かについては、「自己評価の高さ」のみがマイナスに寄与する。すなわち自己評価の高い生徒は進路を変えない傾向が見られる。③の結果とあわせると、自己評価の高い生徒は内定を得やすく、未内定であってもあきらめずに就職活動を続けている生徒が多い傾向にあると推察される。

6. 補論 — 総合学科について

6.1 総合学科と進路決定過程

言うまでもないことであるが、進路決定過程に「学科」が与える影響は大きい。普通科や商業科など、選んだ学科によって学ぶ内容が異なってくるのであるから当然といえる。ちなみに本章での多変量解析による分析では、さらに同じ学科内での違いを補足する変数として、学校の創立年や大学進学率、タイプ別進路指導の程度などを使用している。

ところで、平成6年に制度化された「総合学科」であるが、別名「第3の学科」とも呼ばれているように普通科と職業系学科の両方の側面をあわせもつ学科として、現在でも文部科学省によってその設置がすすめられている。その教育の特色としては「幅広い選択科目の中から生徒が自分で科目を選択し学ぶことが可能であり、生徒の個性を生かした主体的な学習を重視すること」、「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること」などがあげられる⁽⁶⁾。つまり、将来の職業およびそのための進路を考慮しながら科目を選んで履修・学習し、また学習を通じて将来の職業およびそのための進路について考える学科と言えるだろう。よって、各生徒の個性を考慮に入れることができる反面、いくら「系列」による大枠があるとはいえ、普通科進学校や職業系高校のように入学すればなんとなくではあっても卒業後が見える学科に比べ、生徒本人が将来の職業やそのための進路についてより向き合うことが求められているともいえる。そして向

き合えば向き合うほど、進路決定過程において迷う可能性が高くなるのではないだろうか。

また、同じ「総合学科」であっても、その背景は多様であり、大まかには①新設、②普通科と職業系学科を改編して設置、③普通科のみを改編して設置、④職業系学科のみを改編して設置の4類型に分けることができる⁽⁹⁾。さらに地域によってどの類型が多いのかという点には違いがあり、今回の調査対象県で言えば、宮城県では②が多く、神奈川県では③が多い⁽¹⁰⁾。背景に言及する理由は、将来の職業およびそのための進路についてトータルで考えることが求められるのが総合学科であるが、前身校のタイプによってはその要求に応え切れない可能性もあるのではないかと推察されるためである。

ただし、今回のデータはタイプ別に詳細な分析を行うほど充実してはいない。そこで補論として、簡単な概要の把握を試みることにしたい。

6.2 分析概要

表16が総合学科の類型別に見た在籍生徒の特徴である。類型④の生徒は就職者の比率が高く四年制大学進学（希望）者がほとんどいないのに対し、類型②や類型③では就職（希望）者と四年制大学進学（希望）者の比率がほぼ同じといった違いが確認できる。また希望進路変更回数については、類型③、類型②、類型④の順で変更回数が高くなる傾向が見られた⁽¹¹⁾。前身校の学科と進路決定過程の迷いやゆらぎの程度にはやはり関連があるのかもしれない。

また、表17を見ると、どの類型でも最も多いのは「一貫して就職を希望して内定を得た」パターンであるが、類型②や類型③には一貫して大学進学を希望している生徒がいるのに対し、類型④ではそういったパターンの生徒は見られないなど、進学志向の低い様子がうかがえる。

表 16 予定進路、性、希望進路変更回数、希望進路変更有無別総合学科の類型

		総合学科計		②普通科と 職業系学科 を改編して 総合学科		③普通科を 改編して 総合学科		④職業系学科 を改編して 総合学科		参考： 単位制普通科	
学校数		9		5		3		1		4	
サンプル数		594		256		221		117		290	
		人 (%)		人 (%)		人 (%)		人 (%)		人 (%)	
性別	男	305	51.3	120	46.9	112	50.7	73	62.4	105	36.2
	女	289	48.7	136	53.1	109	49.3	44	37.6	185	63.8
		Pearsonの χ^2 乗7.803 漸近有意確率(両側)0.020									
回数 希望 進路 変更	0回	202	34.0	93	36.3	64	29.0	45	38.5	82	28.3
	1回	202	34.0	89	34.8	70	31.7	43	36.8	100	34.5
	2回	151	25.4	56	21.9	74	33.5	21	17.9	84	29.0
	3回	32	5.4	16	6.3	12	5.4	4	3.4	20	6.9
	4回	7	1.2	2	0.8	1	0.5	4	3.4	4	1.4
		Pearsonの χ^2 乗20.399 漸近有意確率(両側)0.009									
希望進路変更回数平均		1.06		1.00		1.17		0.97		1.19	
変更 有無	希望 進路 変更なし	202	34.0	93	36.3	64	29.0	45	38.5	82	28.3
	変更あり	392	66.0	163	63.7	157	71.0	72	61.5	208	71.7
		Pearsonの χ^2 乗4.158 漸近有意確率(両側)0.125									
高校 卒業 後の 予定 進路	正社員内定あり	165	27.8	62	24.2	48	21.7	55	47.0	49	16.9
	正社員未内定	59	9.9	17	6.6	11	5.0	31	26.5	9	3.1
	専門・各種学校：進学先決定済み	107	18.0	51	19.9	39	17.6	17	14.5	88	30.3
	専門・各種学校：進学先未決定	19	3.2	12	4.7	5	2.3	2	1.7	17	5.9
	短大：進学先決定済み	55	9.3	22	8.6	31	14.0	2	1.7	43	14.8
	短大：進学先未決定	14	2.4	8	3.1	6	2.7			1	0.3
	4年制大学：進学先決定済み	88	14.8	39	15.2	47	21.3	2	1.7	53	18.3
	4年制大学：進学先未決定	37	6.2	23	9.0	14	6.3			13	4.5
	フリーター	24	4.0	11	4.3	7	3.2	6	5.1	10	3.4
	家業手伝い	3	0.5	1	0.4	1	0.5	1	0.9		
	その他	3	0.5	2	0.8			1	0.9	2	0.7
	卒業後まったく未定	6	1.0	3	1.2	3	1.4				
進学希望：詳細不明	14	2.4	5	2.0	9	4.1			5	1.7	
		Pearsonの χ^2 乗121.391 漸近有意確率(両側)0.000									

※類型①のタイプの学校は今回のサンプルには含まれていなかった。

表 17 総合学科の類型別希望進路の変更パターン一覧

						男女計										
						総合学科					参考：					
サンプル数						計			類型②		類型③		類型④		単位制普通科	
平均希望進路変更回数						1.06			1.00		1.17		0.97		1.19	
高校 1年	高校 2年	高校 3年 春	高校 3年 夏	高校 3年 冬	希望 進路 変更 回数	人数	%	累積 %	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位
就職	就職	就職	就職	就職内定あり	0	75	12.6	12.6	28	1	17	1	30	1	13	3
大学	大学	大学	大学	大学決定	0	43	7.2	19.9	26	2	17	1	-	-	28	1
専門・ 各種 大学	専門・ 各種 大学	専門・ 各種 大学	専門・ 各種 大学	専門・各種 決定	0	21	3.5	23.4	8	4	10	3	3	5	19	2
就職	就職	就職	就職	就職内定なし	0	21	3.5	26.9	14	3	7	4	-	-	9	4
専門・ 各種 大学	専門・ 各種 短大	就職	就職	就職内定あり	1	11	1.9	32.0	6	5	4	5	1	14	2	20
短大	短大	短大	短大	短大決定	1	8	1.3	33.3	6	5	2	13	-	-	5	7
就職	就職	就職	専門・ 各種	専門・各種 決定	1	6	1.0	35.5	3	10	2	13	1	14	-	-
大学	大学	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・各種 決定	1	6	1.0	36.5	6	5	-	-	-	-	2	20
迷って いた	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・各種 決定	1	6	1.0	37.5	3	10	1	29	2	9	5	7
迷って いた	迷って いた	就職	就職	就職内定あり	1	6	1.0	38.6	-	-	2	13	4	3	2	20
考えて なかった	迷って いた	大学	大学	大学決定	2	6	1.0	39.6	1	33	4	5	1	14	2	20
就職	就職	就職	就職	フリーター	1	5	0.8	40.4	2	15	2	13	1	14	1	39
就職	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・各種 決定	1	5	0.8	41.2	4	9	1	29	-	-	2	20
専門・ 各種	専門・ 各種	専門・ 各種	就職	就職内定あり	1	5	0.8	42.1	1	33	1	29	3	5	1	39
専門・ 各種	短大	短大	短大	短大決定	1	5	0.8	42.9	2	15	3	8	-	-	2	20
短大	短大	短大	短大	短大未決	0	5	0.8	43.8	2	15	3	8	-	-	1	39
大学	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・各種 決定	1	5	0.8	44.6	2	15	3	8	-	-	6	5
迷って いた	就職	就職	就職	就職内定あり	1	5	0.8	45.5	-	-	1	29	4	3	1	39
考えて なかった	就職	就職	就職	就職内定あり	1	5	0.8	46.3	2	15	-	-	3	5	-	-
考えて なかった	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・各種 決定	1	5	0.8	47.1	2	15	1	29	2	9	3	16
考えて なかった	迷って いた	就職	就職	就職内定あり	2	5	0.8	48.0	3	10	2	13	-	-	1	39
専門・ 各種	就職	就職	就職	就職内定あり	1	4	0.7	48.7	3	10	1	29	-	-	4	9
専門・ 各種	専門・ 各種	就職	就職	フリーター	2	4	0.7	49.3	2	15	1	29	1	14	-	-
専門・ 各種	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・ 各種	専門・各種 未定	0	4	0.7	50.0	2	15	1	29	1	14	4	9
考えて なかった	迷って いた	就職	就職	就職内定なし	2	4	0.7	50.7	2	15	-	-	2	9	-	-

※「総合学科計」について全 133 パターン中上位 27 パターン（全サンプルの 50.7%）を抽出